仏教徒コサックの教団と権力

井上　岳彦

1771 年の東遷後もロシア領に留まったカルムィク人の一部は、1798 年にドン・コサック身分に編入された。本報告は、このドン・カルムィク人の僧伽について論じたものである。従来、ドン・カルムィク人は、カルムィク人のマイノリティ・グループとして位置付けられ、オレンブルグ・コサックやテレク・コサック所属のカルムィク人らと同等に理解されてきた。しかし、ドン・カルムィク人社会は、ザバイカルのブリヤート人社会やヴォルガのカルムィク人社会と同様に、政府によって仏教教団が創設されたという点で他の仏教徒社会と異なっていた。それにもかかわらず、先行研究では、ブリヤート民族政策とカルムィク民族政策の対置によって、ロシア帝国の仏教徒社会の理解が行われてきた。報告者は、最近公開された新史料を使用して、19 世紀のドン・カルムィク人仏教徒のおかれた状況を再考察した。

ドンのアタマン・プラートフは、1803 年に、コサック身分に転換したドン・カルムィク人をドン川下流域左岸に集住させた。このカルムィク居住地は、1806 年に 3 つのウルス（上ウルス、中ウルス、下ウルス）、計 13 個のソトニャ村から成るカルムィク管区となった。その人口は決して多くなかったが、ドン軍州では唯一特定の管区を与えられた特別な存在だった。ドン・カルムィク人は、ドン・コサック軍での野戦連隊勤務、域内警邏勤務、牧夫勤務に従事した。周辺諸民族の流入もあって、ドン軍州におけるドン・カルムィク人の人口割合や存在感は徐々に低下したが、彼らが提供する良質な軍馬は高く評価された。また、陸軍少将でドン・コサックの歴史家でもあるブロネフスキーは、『ドン軍統治規程』が成立する前年の 1834 年に、ドン・カルムィク人を評して「彼らは今やロシア帝国の（カザン・タタールを除く）異族人臣民のなかでも最も忠実で有用」だとし、ロシア国家のためにドン・コサックと共に闘ってきた歴史的な戦友であることを強調し団結を促している。さらに、1839 年、アタマンのヴラソフは、カルムィク教区学校の開校式にコサック兵とともに僧侶を動員し、ドン・カルムィク人が臣民として帝国に統合される姿を中央政府に示した。

寺院や僧侶の数の削減は、ドン・カルムィク人社会においても推進された。当初は隣接するアストラハン県での仏教政策が随時参照されたが、次第に独自の政策が採られるようにな

った。その特徴としては、僧職定員を厳格に大幅に縮小させる一方で、正規僧侶には限定的だが権力を与えたことにある。1835 年に僧伽をバクシャを頂点とする教会構造に編成し、1841 年に寺院・僧侶数を約 10 分の 1 に削減した。ここで特筆すべきは、アタマン・ホムトーフがバクシャ・ガンジノフとの協議の末に合意に達した改革案（1849 年）である。すなわち、この時、バクシャによる僧職推挙権が強化され、イスラームの場合と同じように、僧侶選定における能力・品行審査書の作成が決定された。また、新規の僧侶をカルムィク教区学校出身者に限定するとともに、彼らにロシア語とカルムィク語を必修科目として課した。内務省外国信教宗務総局から陸軍省を通じて出された要請に対して、アタマンとバクシャが仏法に照らし合わせて妥協点を見出した点は重要である。確かに、ドン・カルムィク人の僧伽は、陸軍省の中で大きく再編されそのコントロールのもとに置かれたが、そのことは帝国社会からの仏教徒の排除を意味していたのではない。むしろ陸軍省は、僧侶の仲介によってドン・カルムィク人をロシア帝国に包摂することを試みていたと考えられる。

1867 年のドン・コサック軍改革案の審議でも、将校たちの僧侶への期待が垣間みえる。たとえば、騎兵少尉ダルジノフは、「市民性の涵養」のために、教区学校で『創世記』やロシア史とともに、チベット語やカルムィク語、仏教を教える必要性を主張した。さらに、卒業生の高等教育への進学を軍の資金で助成し、将来、大学出身のバクシャが登場することを望んだ。また、軍団スタルシナのパヴロフは、ロシア語を流暢に操るバクシャが信徒に良い影響を与え、僧侶がカルムィク局協議会に出席し地域行政に積極的に参加することを求めた。このような期待は、僧侶の影響力の排除に注力したアストラハン県では貴族に向けられていたのである。ドン軍州の僧侶の側もまた、皇帝と臣民を結びつけることに積極的に関与した。

発表では、ドン・カルムィク人の聖地巡礼についても簡単に説明した。ドン・コサックのあいだで力を蓄えた僧侶は、アストラハン県の僧侶に先駆けて、18 世紀以来絶えていたモンゴリアやチベットへの巡礼を再開させた。彼らが巡礼先で入手した仏教書は、その後、僧侶たちに大きな影響を与えたのだが、このことについては別の機会で改めて論じたい。

（日本学術振興会特別研究員 PD）